

牛を飼いながら山をつくる
富士山を望む尾根

ジャージー牛がくつろぐ

山地酪農に牛舎はない

移住に迷いはなかったです



はなさか
花坂 薫
さん

神奈川県山北町
薫る野牧場 牧場主

戦後間もないころ、植物生態学者である猶原
恭爾さんが提唱した、日本国内に自生する野
シバを主とした在来野草を有効に活用しなが
ら、山を管理する手段である山地酪農。薫さ
んは移住した地で実践する。



365日、山で放牧

19頁：牧場の広さは8・8畧。ジャージー牛は小柄で山も歩きやすいという。
 20頁：(右上) 牧場は広いが牛の生活への目配りが行き届いており、薫さんと牛たちの距離は近い。
 (右下) 日光を遮る落ち葉や枝を燃やす。灰は野草の肥料にもなる。
 (左上) 目の前に連なる山々。牛もまた山のでっぺんで暮らしている。
 (左下) 朝夕のおやつタイム。薫さんの呼び声に応じて、牛たちは一列になつて搾乳小屋へ。



牧場の朝は6時半の搾乳から始まる。搾乳は朝夕2回。「こー、こー、こー」という呼び声を合図に牛たちが三々五々に搾乳小屋をめざして山の斜面をのぼってくる。

搾乳小屋の前まで来ると牛たちは縦一列に並び、小屋の扉が開くのを待つ。並ぶ順番は毎日同じ。

搾乳する牛は小屋の中に入り、搾乳しない牛は小屋の外でおやつを食べている。牛たちの主食は牧場に自生する野シバだから、ここではおやつ。地元の米屋さんからもらう米糠とビートパルプ(砂糖ダイコンの搾りかす)を食べる。

標高700mにある薫^{かお}の野牧場に牛舎はない。季節によって牛の生活エリアは移動する。寒くなるころから4月半ばごろまでは牧場の入口付近のなだらかな斜面、4月半ばごろから秋ごろまでは牧場の奥のエリアで過ごす。

2018年6月、5頭のジャージー牛を迎え入れて、花坂薫さん(32歳)は、薫る野牧場をスタートした。薫さん一人で始めた牧場もスタートから3年、現在は、夫の拓人^{ひろひと}さん(28歳)とアルバイト従業員の三人体制で運営している。

牛は5頭。れもん、あやめ、すみれ、あられ、れおんと名付けている。れもんとあやめは牧場がスタートしたときからの牛。死んでしまった牛もいるが、新しい命も誕生した。すみ



牧場見学は大人気。観光牧場ではないので、牛の世話や牧場管理の作業スケジュールの都合で見学日を決め、牧場のHPから募集する

れとあやめが出産を控えており、まもなく7頭になる予定だ。

薫る野牧場の牛乳は地元山北町共和地区内の10軒に週1回宅配する。さらに、牛乳や生乳を使ったジェラート・ソフトクリームを扱う販売店は、山北町を中心に神奈川県内の鎌倉や平塚や東京では国分寺にまで広がってきた。オンラインショップを利用する遠方の人とはSNSでの交流もある。

「500ミリットル650円の牛乳です。おいしいというだけでなく、支援のお気持ちだと思えます」と感謝の言葉を口にする。今後は、規模を拡大し、より経営を安定させていくという。

大学生のときの出会い

薫さんは、神奈川県立高校普通科から東京農業大学生物産業学部食品科学科に進んだ。

「もともと畜産専攻ではなく、卒業後は乳業会社に就職し乳製品の開発などに携わりたいと考えていました」と言う。

その彼女が初めて牛に触ったのは、大学3年生のとき。山地酪農を本で知り、それを実践する岩手の牧場を一人で訪れた。在学中の研修と、卒業後の就職期間を含め計4年半、山地酪農を学んだ。

その後、神奈川県が運営していた育成牧場が返還されることになり土地を貸していた共和地区の人々が利用法を模索しているという話を伝え聞き、2016年秋に山北町

に移住。「丹沢湖は高校駅伝で走った思い出の地。移住に迷いはなかったです」ときっぱり。土地は山北町共和財産区。小屋の建設、電気工事、牧場のロゴ作成、牧場入口の門柱制作など、地元の人々に協力してもらいながら、



「はなさかひろとのしごと」というHPで薫る野牧場や山北町のこと、稲作、山歩キツアーの企画や地方移住のことなどについて情報発信している夫の拓人さんと

1年半かけて牧場の準備を進めた。

牛飼いとEVEのこ

牛は、お腹がすけば野シバなど自生する野草を食^はみ、日差しの強い日には木陰へなど

と心地よい場所を求めて歩きながら土を踏み固める。当然、排泄もする。季節が移り、彼らが別のエリアに移動したあとには踏み固め整地された土と葉が食べつくされた野シバの根とふん尿の堆肥が残される。翌年の同じころ、牛がこのエリアに再び戻ってきて暮らすときには根をしっかりと新しい野シバが生えている。根が強い野シバは山崩れを防ぐという役割も果たす。ここで山地酪農が「牛を飼いながら山づくりをしています」という言葉とつながる。

薫さんは「日本の面積の約7割を占める山林には、牛の主食になる植物がたくさん生えています。それが活用されずに放置されているんです」と残念がる。

乖離する農と食

つまるところ山地酪農とは何だろうか。

「山地酪農とは多くの乳量を求めるのではなく、牛の力を借りて山づくりをしながら、乳生産による収入を得ることで、経済的にも持続していく手法」と薫さんは説く。国土保全という観点からは「山地酪農が全国に広がれば、乳の生産と山林の管理を両立できる産業」であり「酪農や山づくりの新たな選択肢」とも提言する。

山地酪農には山地酪農ならではの苦労もある。薫さんは一貫して「乳は仔牛が飲んだあとのおすそわけ」という考え方で牧場を運営している。

「牛は常にお乳を出すわけではありませ

ん。母牛が生まれた仔牛を育てるためにお乳を出します。仔牛の健やかな成長には、母乳のお乳が欠かせません。私たち人間は、仔牛が飲んだあとの残りをおすそわけしてもらっているのです」と言う。

また水分の多い草を主食とする牛の乳は脂肪分が薄くなる。どのような草を食べるかで乳の味や香りも変化する。しかし日本では脂肪分の高い乳のほうが高値で売れるし、日本の消費者は品質が一定であることを好む傾向にある。

「食」と「農」は時として乖離^{かいり}する。地球上の飢餓人口は多い。「食」の側から見れば、品質、供給量、価格の安定供給の重要性はいまも変わらない。他方、「農」の側に立てば、山地酪農で供給される乳が持つ不安定な部分こそ「山地酪農ゆえの特性」と考え、牛乳の価格は乳だけでなく山地酪農が存在する価値と捉えることもできる。

どちらが正しいかということを問うよりも、いまの自分はどう思い、どちらを選択するかを一人一人が考えることこそが大切ではないだろうか。

フランスの小説家マルセル・プルーストはこんな言葉を残している。「真の発見の旅とは新しい景色を探ることではない。新しい目で見ることなのだ」と。

薫る野牧場の景色はずっと変わらなくても、考えを重ねる都度、目に映る牧場の姿に、新しい景色が見えるかもしれない。

(文／秋岡栄子 撮影／河野千年)